

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古文における「奇洪」：宋祁に対する評価を中心に
Author(s)	渡部, 雄之
Citation	中國中世文學研究, 66 : 1 - 20
Issue Date	2015-09-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042520
Right	
Relation	



古文における「奇澁」——宋祁に対する評価を中心に——

渡部雄之

一 はじめに

北宋の文人、政治家である宋祁（九九八〜一〇六一）は、兄の宋庠（九九六〜一〇六六）とともに若くして科挙に上位で合格し、当時「二宋」と称された。『宋史』の伝に「祁兄弟皆以文學顯、而祁尤能文。」（祁兄弟皆文學を以て顯はれ、而して祁尤も文を能くす。）とあるように、特にその文才によって名を知られたが、詩人としてもその佳句が喧伝されるなど、宋代の文学を考える上で重要な人物の一人である。

宋祁は歐陽脩（一〇〇七〜一〇七二）とともに『新唐書』の編修に携わっており、列伝百五十巻はほとんど彼の手になる。そして、宋祁の文章に対する後世の評価は、常にこの『新唐書』列伝の評価と表裏一体をなす。例えば、『四庫全書總目提要』卷一五二「集部・別集類五」『宋景文集』では次のように評している。

晁公武『讀書志』謂「祁詩文多奇字、證以蘇軾詩『淵源皆有考、奇險或難句』之語。以今觀之、殆以祁撰

『唐書』彫琢剗削、務爲艱澁、故有是言。實則所著詩文、博奧典雅、具有唐以前格律、殘膏賸馥、沾句靡窮、未可盡以詰屈斥也。

晁公武『讀書志』「祁の詩文 奇字多し」と謂ひ、證するに蘇軾詩の「淵源 皆考有るも、奇險にして或いは句し難し」の語を以てす。今を以て之を觀るに、殆ど祁の『唐書』を撰するに彫琢剗削し、務めて艱澁を爲すを以て、故に是の言有り。實は則ち著す所の詩文、博奧典雅にして、唐以前の格律を具有し、殘膏賸馥、沾句すること窮まる靡く、未だ盡く詰屈なるを以て斥くべからざるなり。

「奇險」、「艱澁」、「詰屈」、あるいは「奇字」、「難句」はいずれも詩や文章が難解な様をいう。このように、宋祁の文学は難解であるとの評がしばしば行われるのだが、晁公武、蘇軾の評価が宋祁の「彫琢剗削し、務めて艱澁を爲す」という『新唐書』編修態度に原因があると『提要』が指摘する点は注目しなければならない。「今を以て之を觀るに」、宋祁の文学は「詰屈」であることによつて

その全てを斥けることはできないのである。このように、

宋祁の文学に対する評価には宋代から清代に至るまでに変化があり、宋人による「難解」という評価は『新唐書』列伝に対する評価と直接結び付いていたのである。

宋代の古文復興において、「難解」は常に重要な問題として意識されていた。例えば宋初の古文家柳開（九四七〜一〇〇〇）は「応責」において「古文革者、非在辭澁言苦、使人難讀誦之。在于古其理、高其意、隨言短長、應變作制、同古人之行事、是謂古文也。」（古文は、辭澁言苦にして、人をして之を讀誦し難からしむるに在るに非ず。其の理を古にし、其の意を高くし、言に隨ひて短長し、變に應じて作制し、古人の行事と同じくするに在り、是れを古文と謂ふなり。）と述べており¹⁾、また歐陽脩は嘉祐二年（一〇五七）の科擧で、当時流行していた難解な太学体を斥けることで明快達意の古文を正統の地位に据えた。古文によって書かれた『新唐書』列伝に対する難解という評価も、宋人のかかる問題意識と関係して現れたと考えられる。

では、何故宋人は『新唐書』列伝、すなわち宋祁の古文にかくも低い評価を下すのか。彼らは古文はどうあるべきものと考えていたのか。本稿では、宋祁の文章に対する宋人の評価を分析することで、こうした問題について考えてみたい。その際、宋祁自身の古文に対する考え方も重要となってくるので、まずは彼の文学観について述べることにする。

二 宋祁の文学観の変化と古文

宋祁の文学観、特に古文に対する考え方については、すでに湯淺陽子氏が「宋祁と古文」の中で、『新唐書』の編修と文章修行という視点から考察を行っている²⁾。その中で湯淺氏は、『宋景文公筆記』卷上「釈俗」の次の一条を引いている³⁾。

①余少爲學、本無師友、家苦貧無書。習作詩賦、未始有志立名於當世也。願計粟米養親、紹家閥耳。年二十四而以文投故宰相夏公。公奇之、以爲必取甲科。吾亦不知果是歟。天聖甲子、從鄉貢試禮部、故龍圖學士劉公嘆所試辭賦、大稱之朝、以爲諸生冠。②吾始重自淬礪力於學、模寫有名士文章、諸儒頗稱以爲是。③年過五十、被詔作『唐書』、精思十餘年、盡見前世諸著、乃悟文章之難也。雖悟於心、又求之古人、始得其崖略。因取視五十已前所爲文、赧然汗下、知未嘗得作者藩籬、而所效皆糟粕芻狗矣。夫文章必自名一家、然後可以傳不朽。若體規畫圓、準方作矩⁴⁾、終爲人之臣僕。古人譏屋下作屋信然。陸機曰、「謝朝花於已披、啓夕秀於未振。」韓愈曰、「惟陳言之務去。」此乃爲文之要。五經皆不同體、孔子沒後、百家奮興、類不相沿。是前人皆得此旨。嗚呼、吾亦悟之晚矣。雖然若天假吾年、猶冀老而成云。

①余少くして學を爲すに、本師友無く、家苦だ貧

しくして書無し。習ひて詩賦を作るも、未だ始めより志の名を當世に立つる有らざるなり。粟米を計りて親を養ひ、家閭を紹がんことを願ふのみ。年二十四にして文を以て故の宰相夏公に投ず。公之を奇とし、以爲へらく必ず甲科に取られんと。吾亦た果たして是なるを知らず。天聖甲子、郷貢に従ひ禮部に試みられ、故の龍圖學士劉公 試みらるる所の辭賦に嘆じ、大いに之を朝に稱へ、以て諸生の冠と爲す。

②吾始めて自ら淬礪して學に力むるを重んじ、有名之士の文章を模寫するに、諸儒頗る稱へて以て是と爲す。③年五十を過ぎ、詔せられて『唐書』を作し、精思すること十餘年、盡く前世の諸著を見、乃ち文章の難きを悟るなり。心に悟ると雖も、又た之を古人に求め、始めて其の崖略を得。因りて取りて五十已前に爲る所の文を視るに、赧然として汗下り、未だ嘗て作者の藩籬を得ずして、效ふ所 皆糟粕芻狗なるを知れり。夫れ文章は必ず自ら一家を名のり、然る後以て傳はりて不朽なるべし。若し規に體して圓を書き、方に準じて矩を作らば、終に人の臣僕と爲らん。古人 屋下に屋を作すを譏るは信に然り。陸機曰く、「朝花を已に披けるに謝し、夕秀を未だ振はざるに啓く」と。韓愈曰く、「惟だ陳言を之務めて去る」と。此れ乃ち文を爲すの要なり。五經 皆體を同じくせず、孔子没して後、百家奮興するも、類相ひ治はず。是れ前人 皆此の旨を得たり。嗚呼、

崑派の一人に数えるかどうかは意見が分かれる¹²⁾が、彼もまた非常に修飾を重んじた詩人であり、その詩賦は當時の人々に高く評価されていた。そうしたことから、宋祁らは彼の知遇を得ることで科挙受験を有利に進めようと、自らの文を献呈したものとされる¹³⁾。その後兄弟は、天聖甲子（二年、一〇二四）に礼部の試験に応じて及第する。そして宋祁は、その時作った辭賦が知貢奉の劉筠（九七一〜一〇三二）に評価され、「諸生の冠と爲」った¹⁴⁾。この頃宋祁が劉筠に送った書簡に次のようにある¹⁵⁾。

竊惟吟詠之作、神明攸繫。内導情性、旁通¹⁶⁾謠俗。造端以諷天下之事、變文¹⁷⁾以憂萬物之藹。音之急緩、隨政之上下。大抵三百篇、皆有爲¹⁸⁾爲之、非徒爾耳。後雖體判五種、時經三變、音制彌婉、體裁益緻、以浮聲切響相鎮、以彫章縉采相矜、然而大方之家、往往披華於沈宋之林、收實乎曹王之囿、窻其流宕、歸之雅正。

竊かに惟ふに吟詠の作、神明の繋かる攸なり。内は情性を導き、旁は謠俗に通ず。端を造¹⁶⁾して以て天下の事を諷し、文を變じて以て萬物の・を憂す。音の急緩は、政の上下に隨ふ。大抵三百篇は、皆爲す有りて之を爲し、徒に爾るに非ざるのみ。後 體五種に判かれ、時 三變を經、音制 彌 婉に、體裁 益緻にして、浮聲切響を以て相ひ鎮め、彫章縉采

吾亦た之を悟ること晩し。然りと雖も若し天 吾に年を假さば、猶ほ老いて成らんことを冀ふと云ふ。

これを見ると、宋祁の文学観は二度変化していることが分かる。特に『新唐書』編修参加以降は、それまでの作文態度を一変させており、大変重要な変化であると言える。湯淺氏は、古文家である宋祁が『新唐書』の編修を通じて、文章は如何なるものであるべきと考えるに至ったかということを中心に論じており、こうした変化が示す意味については述べていない。そこで以下、①少年時代から科挙合格まで、②科挙合格後から『新唐書』の編修に参加するまで、③『新唐書』の編修に参加してから没するまでの三つの時期に分けて宋祁の文学観の変化を追い、それが彼の古文において如何なる意味を持つのかを考える。

①少年時代から科挙合格まで

若い頃の宋祁は、もっぱら科挙合格のために勉強しており、文によつて名を揚げようとは考えていなかった。この時彼が学んでいたのは、試験科目の中で特に重視されていた詩と賦である。二十四歳の時（天禧五年、一〇二一）、当時安州（現在の湖北省安陸市一带）の長官であった夏竦（九八五〜一〇五一）に兄宋庠とともに謁し¹⁹⁾、作品を献呈して奇とされた。その頃世間でもはやされていたのは、西崑体に倣った艶麗な詩である。夏竦を西

を以て相ひ矜ると雖も、然れども大方の家、往往華を沈宋の林に披き、實を曹王之囿に收め、其の流宕を窻ぎ、之を雅正に歸す。

宋祁は表現と内容いずれをも兼ね備えた詩を作るべきだと主張しており、特に内容については情を表現すべきだと言っている。この後の文章の中で彼は、劉筠の詩を「鉤深縮情、上薄於粹古、促節入律、下偶乎當世。」（深きを鉤け情を縮びて、上は粹古に薄り、節を促し律に入りて、下は當世に偶す。）と評しており、自身の詩観が劉筠の考えに沿うものであることを示している。劉筠は楊億、錢惟演らと並ぶ、西崑派の主要な人物の一人である。宋祁の詩観は、華麗で浮薄であるという西崑体に対する一般的な評価とは異なるものであるが、当時こうした人物に付き従っていたことから、彼は後期西崑派と位置付けられている²⁰⁾。

このように若い頃の宋祁は、もっぱら科挙合格を目的として詩賦を学び、楊億や劉筠らの西崑体を尊ぶという当時の風潮に従っていた。まだ彼独自の文学観というものは形成されておらず、古文に対する志向も窺えない。

②科挙合格後から『新唐書』の編修に参加するまで

科挙合格後、宋祁はようやく本気で文章を学び始めた。試験に合格するというそれまでの目的が、自らの文章の腕を磨き、より良い作品を作るといった目的に変わったの

である。それは、夏竦や劉筠といった名のある文士に自らの作品が認められたことで自信を得たことが契機となったであろう。彼は文章を学ぶ際に、高名な士の文章を模倣するという方法を探り、できあがった作品は多くの人々に称えられた。『新唐書』編修に参加して以降の文学に対する考えを述べた箇所、自身の過去の作品に対する不満を述べ、「規に體して圓を畫き、方に準じて矩を作」るといったやり方を否定しているところから見ると、当時の彼の作品は前人の作品から取り入れたものを相当多く含んでいたようである。かかる文章修練の方法は、典故を多用する西崑派の文学に通じるものがあり、そういう意味では、②は①の延長上にある変化だと言える。

一方で、この時期には古文に繋がる事象も認められる。すなわち字学の修得と奇字の使用である。詳しくは第三節で述べるが、宋人の宋祁に対する評価の一つに、字学に造詣が深く、使用する文字が難解だというのがある。宋祁は古代の文字に通じることによって、自らが文章を書く際には、古く、正しい字を使うことにこだわっていた。彼の学識がこの時期すでに深いものであったことは、次の「集韻韻例」の記述から分かる¹⁶⁾。

近世小學淺廢、六書亡缺、臨文用字、不給所求。……先帝時、令陳彭年、丘雍因法言舊說爲刊益。景祐四年、太常博士、直史館宋祁、太常丞、直史館鄭戩¹⁷⁾建言、「彭年、雍所定、多用舊文、繁略失當。」

あったのである。

③『新唐書』の編修に参加してから没するまで五十歳を過ぎて、宋祁は『新唐書』の編修に参加することになり¹⁸⁾、その執筆の過程で多く考えを巡らし、広く前代の書を読んだ結果、文章を作ることの難しさを悟った。そして、前人の模倣に努めるというそれ以前の作文態度を、屋上に屋を架すようなものだと強く反省した。すなわち、従前のやり方では、自らの個性が発揮された作品を作ることはいかなるべきか考えたのである。文章作成における個性の發揮、それがこの時期重要な課題として彼の中に浮上した。この課題を克服するために宋祁が採った手段こそ、古文への志向だったのである。

宋祁の古文への志向は、特に韓愈の尊重によって始まったと思われる。文章を書く要点を述べる際に、「惟だ陳言を之務めて去る」という「答李翊書」(『宋文公校韓昌黎先生集』卷一六)の一節を引いており、『宋景文公筆記』でも、後に見るようにしばしば韓愈が持ち出されている。また、『新唐書』韓愈伝にも「每言文章自漢司馬相如、太史公、劉向、楊雄後、作者不世出。故愈深探本元、卓然樹立、成一家言。其『原道』、『原性』、『師說』等數十篇、皆奧衍閑深、與孟軻、楊雄相表裏而佐佑六經云。至它文造端置辭、要爲不襲蹈前人者。」(毎に言ふ文章は漢の司馬相如、太史公、劉向、楊雄より後、作者 世に出でず。故に愈 深く本元を探り、卓然として樹立し、一家の言

因詔祁、戩與國子監直講賈昌朝、王洙、同加脩定、刑部郎中、知制誥丁度、禮部員外郎、知制誥李淑爲之典領。今所撰集、務從該廣、經史諸子及小學書更相參定。

近世 小學淺廢^{ややく}、六書亡缺し、文に臨み字を用ふるに、求むる所を給せず。……先帝の時、陳彭年、丘雍をして法言舊説に因りて刊益を爲さしむ。景祐四年、太常博士、直史館宋祁、太常丞、直史館鄭戩建言す、「彭年、雍の定むる所、多く舊文を用ひ、繁略 當を失す」と。因りて詔して祁、戩と國子監直講賈昌朝、王洙とをして、同に脩定を加へしめ、刑部郎中、知制誥丁度、禮部員外郎、知制誥李淑をして之が典領と爲らしむ。今撰集する所、務めて該廣に從ひ、經史諸子及び小學の書 更相^{ちも}參定す。

景祐四年は一〇三七年、本時期の半ばを少し過ぎた頃である。当時彼が就いていた官は直史館であり、職務上の必要から、字学を修め始めたと思われる。『続資治通鑑長編』によると、宋祁は景祐元年(一〇三四)に、『広韻韻略』の修正も行っており、その際該書にでたらめな文字の多いことを指摘している。

古代の正しい字体を用いるということも、復古の一つの形である。文学の上では西崑派の影響を強く受けていた本時期であるが、同時に復古の意識が芽生え始め、後の古文への志向に繋がる下地ができてつつあった時期でもあつた。

また、当時の風潮も彼が古文を志向する一因になつたと思われる。東英寿氏によると、慶曆四年(一〇四四)に、歐陽脩らによるいわゆる慶曆の新政が始まり、その中の科挙改革、学校の拡充によって、士大夫たちの間に古文を重視するという流れが生まれたという¹⁹⁾。この年は、あたかも宋祁が『新唐書』の編修を命じられた前年にあたる。歐陽脩が編修責任者の曾公亮に代わって書いた「進新修唐書表」(『表奏書啓四六集』卷二)、『歐陽文忠公集』卷九一)に「文采不明」(文采明らかならず)、「言淺意陋」(言は浅く意は陋し)とある²⁰⁾ように、五代に作られた『旧唐書』の欠点の一つに、文章のまざさが指摘されていた。そこで宋祁らは、新たな『唐書』を撰するにあたり、文章に対しても見直しを行い、当時士大夫の間で流行しつつあつた古文を採用したものと推測

される。

本時期の宋祁の文学観については湯淺氏の論考に詳しいが、後の論述に関わるため、その他の関係する資料をいくつか見てみることにする。『宋景文公筆記』から二条を引用する¹⁹⁾。

柳州爲文、或取前人陳語用之、不及韓吏部卓然不可加品目焉。²⁰⁾於古、而一出諸己。劉夢得巧於用事、故韓柳不

柳州 文を爲すに、或いは前人の陳語を取りて之を用ひ、韓吏部の卓然として古に巧ならざるも、一に諸を己より出だすに及ばず。劉夢得 用事に巧みにして、故に韓柳 品目を加へず。(卷上「釈俗」)

柳子厚云、「嘻笑之怒、甚於裂眦、長歌之音、過於慟哭。」劉夢得云、「駭機一發、浮謗如川。」信文之險語。韓退之云、「婦順夫旨、子嚴父詔。」又云、「耕於寬閑之野、釣於寂寞之濱。」又云、「持被入直三省、

丁寧顧婢子語、刺刺不得休。」此等皆新語也。柳子厚云ふ、「嘻笑の怒は、眦を裂くよりも甚だしく、長歌の音は、慟哭に過ぎたり」と。劉夢得云ふ、「駭機一たび發し、浮謗 川の如し」と。信に文の險語なり。韓退之云ふ、「婦は夫の旨に順ひ、子は父の詔を嚴にす」と。又た云ふ、「寬閑の野に耕し、寂寞の濱に釣る」と。又た云ふ、「被を持ちて入りて三省に直するに、丁寧に婢子を顧みて語り、刺刺として休

むを得ず」と。此等は皆新語なり。(卷中「考古」)

前の文では、柳宗元、韓愈、劉禹錫の三者の文を比較している。宋祁は、前代の作に通じてはいるが、そのことばが全て自分独自のものである韓愈を最も上に置き、時に陳腐な語を用いる柳宗元はこれに及ばないとし、故事の引用に巧みである劉禹錫に対しては韓愈、柳宗元は品評を加えなかったとして、彼らに劣ると見ている。

後の文では、柳宗元「对賀者」(『増広注釈音弁唐柳先生集』卷一四)、劉禹錫「上淮南李相公啓」(『劉夢得文集』卷二一)の文を引いて「險語」(耳目を驚かす変わったことば)と評し、韓愈「柳州羅池廟碑」(『朱文公校韓昌黎先生集』卷三一)、「答崔立之書」(同卷一六)、「送殷員外序」(同卷二二)の文を引いて「新語」(それまでに無い新しいことば)と評している。

これらの文には、単に前人の用いた陳腐なことばを避けるだけでなく、それまでに無い新しい表現を追求しようという積極的な姿勢が示されている。同様の考えは内容面にも及んでいる。『宋景文公筆記』卷中「考古」に次のような一条がある。

柳子厚「正符」、「晉說」、雖模寫前人體裁、然自出新意、可謂文矣。劉夢得著「天論」三篇、理雖未極、其辭至矣。韓退之「送窮文」、「進學解」、「毛穎傳」、「原道」等諸篇、皆古人意思未到、可以名家矣。

柳子厚「正符」、「晉說」、前人の體裁を模寫すと雖も、然れども自ら新意を出だし、文と謂ふべし。劉夢得の著す「天論」三篇、理未だ極まらずと雖も、其の辭至れり。韓退之「送窮文」、「進學解」、「毛穎傳」、「原道」等の諸篇、皆古人の意思未だ到らずして、以て名家たるべし。

柳宗元の「正符」、「晉說」は「文」という語で評され、劉禹錫の「天論」三篇はことばがこの上なくすばらしいと称えていることから、その表現面について評価していることになる。だが一方、韓愈の諸作品に関しては、全て古人が考えつかなかったことを書いていると述べていることから、こちらは内容の獨創性を評価していることになる。

以上のように、『新唐書』編修参加以降の文学観は、内容、表現両面で自分独自のものを創り上げるといふ、それ以前とは真逆のものとなっている。この大きな転換は、宋祁が直面した文章作成における個性の發揮という課題と、古文の志向によるその克服に関係して生じたものと考えられる。②の時期に字学によって萌していた復古の意識は、ここに至って大きく現れたのである。①から②、②から③へという時期による文学観の変化は、古文学家としての宋祁が確立していく過程と見る事ができよう。

同時に注目すべきなのは、こうした変化は西崑体の流行と衰退、それに続く古文の重視という当時の風潮と軌

を一にしていることである。見方によっては、宋祁はその時々の流行に合わせて文章作成の方法を変えたと言えなくもない。だが、それまで世人から高く評価されていたやり方を捨て、いまだ完全には復興してしない古文へと向かったところに、宋祁の文学に対する熱意が窺える。彼はかように、より良い文章を書くために大変努力した人であった。

だが後述するように、後世の評価にはその作品を難解だとするものがいくつも現れる。次節からはそうした後世の評価について論じる。

三 字学と奇字

「はじめに」で引いた『四庫提要』に見えるように、『郡齋讀書志』は宋祁の詩文に奇字が多いことを証するため、蘇軾(一〇三六〜一一〇一)の「密州宋国博以詩見紀在郡雜詠次韻答之」詩を引く。『郡齋讀書志』が引くのは全体の第三、四句目であり、第一、二句目も含めて挙げると、「吾觀二宋文、字字照縑素。淵源皆有考、奇險或難句」(吾 二宋の文を觀るに、字字 縑素を照らす。淵源 皆考有るも、奇險にして或いは句し難し)となっている²¹⁾。本詩は、蘇軾の後任である孔宗翰のさらに後に密州の知事となった宋祁の息子宋靖国が、蘇軾が密州在任時に詠んだ詩を集録し、そのことを述べた詩を附して送ってきたのに次韻したものである²²⁾。『提要』は晁公武の言として「祁の詩文 奇字多し」を引用し、蘇軾

詩の第四句「奇險にして或いは句し難し」に注目している。だが『郡齋讀書志』の原文を見ると、「通小學、故其文多奇字。」（小學に通じ、故に其の文 奇字多し。）となっており、前句の「淵源 皆考有り」とも関係する記述となっていることが分かる。蘇軾は、二宋の詩文は一字一字すべてに來歴があるが、時にそれが読み手に難解だと感じさせてしまうと云っているのである。

また唐庚（一〇七一〜一一二一）も、宋祁の文集に附した序文で

仁廟初、號人物全盛時。而尚書與其兄鄭公以文章擅名天下。……兄弟于字學至深、故其文多奇字、讀者往往不識。

仁廟の初め、人物全盛の時と號す。而して尚書と其の兄鄭公と文章を以て名を天下に擅にす。……兄弟字學に于いて至りて深く、故に其の文 奇字多く、讀者 往往識らず。

と、蘇軾と似た意味のことを述べている²³⁾。宋人は宋祁に対して字學を修めた人物という認識を持っており、それが彼の文章に奇字というかたちで影響を与えていると見ていた。

では、彼の修めた字學とは如何なるものだったのか。これについて少し見てみることにする。邵博（？〜一一五八）『邵氏聞見後録』巻二七に次のような記事がある

を饜女と爲すと。始めて俗間の饜女と云ふ者、自^{おのづか}ら本字有るを知る。

本記事の冒頭でもまた、宋祁が文字の發音や意味に通じていたために、彼の著作にしばしば人々の知らない奇字が使われていたと言う。彼の息子は父親に教えられ、『博雅（広雅）』を調べることで、新婚三日目に嫁の実家が婿の家に食物を贈ることを言う時には「饜」字を使うべきことを知った。そして、世間で用いられているそのことばに本字のあることがはじめて分かったと記す。本記事の中の宋祁は、非常に厳格な態度で誤字の存在を指摘し、これを改めさせている。

本来の正しい文字を使うべきであるとする主張は、宋祁の文章の中にいくつも見られ、それは以下のように、しばしば俗あるいは今との対比という形で書かれている。

儒者讀書多隨俗呼、不從本音、或終身不悟者。
儒者 書を讀むに多く俗呼に隨ひ、本音に従はず、
或いは終身悟らざる者あり。

〔宋景文公筆記〕卷上「積俗」

余見今人爲學、不及古人之有根本、每亦自愧。

余 今人の學を爲すこと、古人の根本有るに及ばざるを見、毎に亦た自ら愧づ。

（同上）

唐玄宗始以隸楷易『尚書』古文。今儒者不識古文、自唐開元始。

大儒宋景文公學該九流、于音訓尤邃。故所著書用奇字、人多不識。嘗納子婦三日、子以婦家饋食物書白。一過目即曰、「書錯一字。姑報之。」至白報書、即怒曰、「吾薄他人錯字。汝亦爾邪。」子皇駭、卻立緩扣其錯、以筆塗煖字。蓋婦家書以食物煖女云。報亦如之、子益駭、又緩扣當用何煖字。久之、怒聲曰、「從食從而從大。」子退檢字書『博雅』中出饜字。注云、「女嫁三日、餉食爲饜女。」始知俗間饜女云者、自有本字。

大儒宋景文公の學 九流を該ね、音訓に于いて尤も邃し。故に著す所の書 奇字を用ひ、人多く識らず。嘗て子の婦を納るること三日、子 婦家 食物を饋るの書を以て白す。一たび過目して即ち曰く、「一字を書き錯へり。姑く之を報ぜよ」と。報書を白すに至り、即ち怒りて曰く、「吾 他人の字を錯ふるを薄す。汝も亦た爾るか」と。子皇駭し、卻き立ちて緩やかに其の錯ふるを扣するに、筆を以て煖字を塗る。蓋し婦家の書 食物を以て女を煖すと云ふ。報ずるも亦た之くの如く、子 益 駭き、又た緩やかに當に何の煖字を用ふべきかを扣す。之を久しくして、怒聲ありて曰く、「食に従ひ而に従ひ大に従ふ」と。子退きて字書『博雅』の中を検べて饜字を出だす。注に云ふ、「女 嫁きて三日、食を餉する

唐の玄宗始めて隸楷を以て『尚書』の古文を易ふ。今の儒者 古文を識らざること、唐の開元自り始まる。（同書巻中「考古」）

これらを見ると、宋祁は当時の人々の文字の使い方や發音の仕方が本来の正しいものから外れているのを相当嫌っていたようである。

宋祁の作品中のどの文字が、当時の人に難解だとされたのかを判断するのは難しい。だが以上の資料から推すと、それらはより古い文献に典拠を持つものであったと思われる。宋祁にとつては、そうした用字は皆本来の正しいものであり、文章を書く際にはかくあるべしと考えて使っていたに違いない。だが、時代が移るにつれ、ことばや用字も多少は変化するのは当然である。言語は常に一定ではありえない。そのため、同時代の人は宋祁が用いたそうした文字を理解できないことがまあり、作品をすばらしいとは認めながらも、一方で難しいという印象を与えることになってしまった。すなわち奇字が多いという評価は、今の時代にそぐわないことを敢えて行ったために出てきたものだとしたことである。

四 『尚書』大誥

王得臣（一〇三六〜一一一六）『塵史』巻中・論文に次のような記事がある²⁴⁾。

里人傳宋景文未第時、爲學於永陽僧舍。連處士因問曰、「君好讀何書。」答曰、「予最好『大誥』。」故景文率多謹嚴。至修『唐書』、其言艱、其思苦、蓋亦有所自歟。

里人傳ふ宋景文未だ第せざる時、學を永陽僧舍に爲す。連處士因りて問ひて曰く、「君何の書を讀むを好むか」と。答へて曰く、「予最も『大誥』を好む」と。故に景文率ね多く謹嚴なり。『唐書』を修むるに至り、其の言艱にして、其の思苦なるは、蓋し亦た自ら所有らん。

科挙に及第する前と言っているから、第二節の時期の区分では①にあたる。「大誥」は『尚書』の篇名であり、宋祁は若い頃これを愛読していたため、後に『新唐書』を編修する際、そのことばも内容も難しくなったという。『尚書』は、例えば北周の蘇綽が、西晋以来の浮薄な文体を改めようとした文帝宇文泰の命でそれに倣った文章を書いたという例があるように、古文復興の歴史においては、文章の範とされたこともある書である。だが一方で、韓愈が「佶屈聱牙」(進学解)、『朱文公校韓昌黎先生集』卷(一)と述べたように、堅苦しく読みにくい文章の例として取り上げられることもある。本記事でも、『新唐書』の文章が難解である理由を『尚書』に求めている。『尚書』は確かにいにしえのことばで書かれた「古文」ではあるものの、その筆法を用いて文章を書けば、

たことよりも、ことは、内容が難しいという点に注目していることになる。

『新唐書』編修の際、宋祁は文章を彫琢し、「務めて艱澁を爲」したという『四庫提要』の見方は、北宋の頃からすでに出てきており、時代が下るにつれより厳しい批判の声となっていた。

五 虬戸銑谿の体

『直齋書録解題』は、卷四・正史類でも『新唐書』の難解さを指摘している。

翰林學士廬陵歐陽修永叔、端明殿學士安陸宋祁子京撰。……至和初、乃命修爲紀、志、祁爲列傳。……今案舊史成於五代文氣卑陋之時、紀次無法、詳畧失中、論贊多用儷語、固不足傳世。而新書不出一手、亦未得爲全善。本紀用『春秋』例、削去詔令、雖太畧猶不失簡古。至列傳用字多奇澁、殆類虬戸銑谿體、識者病之。

翰林學士廬陵歐陽修永叔、端明殿學士安陸宋祁子京撰。……至和の初め、乃ち修に命じて紀、志を爲らしめ、祁をして列傳を爲らしむ。……今案ずるに舊史は五代の文氣卑陋の時に成り、紀次 法無く、詳畧 中を失し、論贊多く儷語を用ひ、固より世に傳はるに足らず。而るに新書は一手に出でず、亦た未だ全善を爲すを得ず。本紀『春秋』の例を用ひ、詔

同時代の人には理解困難となってしまう。その点で、本記事の述べる宋祁の文章の難解さは、前節の奇字がもたらす難解さと共通する部分を有する。

ただし王得臣は、単に文章が難しいと否定的な評価だけを下しているわけではなく、「大誥」を好んだために、文章を作る時「謹嚴」(一字一句にこだわる)であったと、作文の姿勢については肯定的に見ている。

それに対し、次の『直齋書録解題』卷一七・別集類中『宋景文集』の文では、もっぱら『新唐書』の難解さを指摘するために、この『塵史』の記事が引かれている。

所撰『唐書』列傳、不稱良史。……景文未第時、爲學於永陽僧舍。或問曰、「君好讀何書。」答曰、「余最好『大誥』。」故景文爲文謹嚴。至修『唐書』、其言艱、其思苦、蓋亦有所自歟。

撰する所の『唐書』列傳、良史と稱されず。……景文未だ第せざる時、學を永陽僧舍に爲す。或ひと問ひて曰く、「君何の書を讀むを好むか」と。答へて曰く、「余最も『大誥』を好む」と。故に景文 文を爲すこと謹嚴なり。『唐書』を修むるに至り、其の言艱にして、其の思苦なるは、蓋し亦た自ら所有らん。

先に『新唐書』の評判が良くないことを言っていることから、ここでは文章を一字一句にこだわって作ってい

令を削去し、^{はなは}太だ畧なりと雖も猶ほ簡古を失せず。列傳に至りては用字 奇澁多く、殆ど虬戸銑谿の體に類し、識者之を病む。

歐陽脩の書いた本紀は『春秋』の筆法を用いているため、飾り気がなく古風な趣があるのに対し、宋祁の書いた列伝は用字がしばしば奇澁であり、「虬戸銑谿の體」に近いと批判する。虬戸銑谿の体は、曾慥(？)一一五五『類説』卷四〇等が引く『朝野僉載』に

徐彦伯爲文多變易求新。以鳳閣爲鷓鴣、以龍門爲風戸、以金谷爲銑谿、以玉山爲瓊岳、以芻狗爲弁犬、以竹馬爲籊籊、以月兔爲魄兔、以赤牛爲炎犢。後進效之謂之澁體。

徐彦伯 文を爲すに多く變易して新を求む。鳳閣を以て鷓鴣と爲し、龍門を以て風戸と爲し、金谷を以て銑谿と爲し、玉山を以て瓊岳と爲し、芻狗を以て弁犬と爲し、竹馬を以て籊籊と爲し、月兔を以て魄兔と爲し、赤牛を以て炎犢と爲す。後進之に效ひて之を澁體と謂ふ。

とある²⁶⁾ように、すでに定着していることばを敢えて別のことばに置き換える表現法をいう。前二節で見た宋祁の文章に対する評価は、『尚書』や前代の字書等、古い文献に拠ったために使用する文字や内容が難しくなると

いうものであったが、虬戸銑谿の体は自ら新たな語を創り出すという点で、それらと大きく異なっている。

『新唐書』に果たして虬戸銑谿の体が見られるかどうかは改めて調査する必要があるが、いずれにせよこうした評価は、『新唐書』編修参加以降、前人の用いなかった独自の表現を重んじたという宋祁の文学観に対する宋人の反撥を示しているように。

この他、俞德隣（一一三二～一二九三）『佩韋齋輯聞』卷三の記事も、宋祁の『新唐書』列伝と徐彦伯の表現法を結び付けており、その冒頭は「宋景文作『新唐書』、人以札闔諂之。札闔者、世俗厭夢之語、謂書門也。譏其好奇耳。」（宋景文『新唐書』を作り、人 札闔を以て之を諂む。札闔は、世俗の厭夢の語にして、門に書するを謂ふなり。其の奇を好むを諷るのみ。）となっている²⁷。ここに見える「札闔」の語は、『錦繡万花谷前集』卷二〇・文章に引く次の記事からきたものである²⁸。

宋景文公修『唐史』、好以艱深之辭文淺易之說。歐公思有以諷之、一日大書其壁曰、「宵寐匪貞、札闔洪休。」宋見之曰、「非『夜夢不祥、題門大吉』耶。何必求異如此。」歐公曰、「李靖傳云『震雷無暇掩聰』亦是類也。」宋公慙而退。今所謂「震霆不及掩耳」²⁹者、係再改。

宋景文公『唐史』を修むるに、艱深の辭を以て淺易の說を文るを好む。歐公以て之を諷する有らんこと

を思ひ、一日其の壁に大書して曰く、「宵寐 貞に匪ず、闔に洪休を札す」と。宋之を見て曰く、「夜夢 祥ならず、門に大吉を題す」に非ざるか。何ぞ必ずしも異を求むること此くの如き」と。歐公曰く、「李靖傳に云ふ『震雷 聰を掩ふに暇無し』も亦た是の類なり」と。宋公慙ちて退く。今の所謂「震霆 耳を掩ふに及ばず」は、再び改むるに係る。

本記事でも、宋祁が『新唐書』を編修する際簡単なことばで言える内容を、わざわざ難解な表現に置き換えたと書いている。特に、同じ編修官の一人である歐陽脩がそうした表現を嫌い、皮肉ったという点が注目される。ただしこの記事の内容は、果たして実際にあった出来事かどうか、真偽が疑われる。例えば、歐陽脩の息子堯（一〇四〇～一〇八五）が書いた歐陽脩の事迹に

初奉勅撰『唐書』、專成紀、志、表。而列傳則宋公祁所撰。朝廷恐其體不一、詔公看詳、令刪爲一體。公雖受命、退而曰、「宋公於我爲前輩、且人所見不同。豈可悉如己意。」於是一無所易。書成奏御、舊制惟列官最高者一人。公官高、當書、公曰、「宋公於傳、功深而日久。豈可掩其名、奪其功。」於是紀、志、表書公名、而列傳書宋公。宋丞相聞之歎曰、「自古文人好相凌掩、此事前所未有也。」

初め勅を奉じて『唐書』を撰し、専ら紀、志、表を

成す。而して列傳は則ち宋公祁の撰する所なり。朝廷其の體の一ならざらんことを恐れ、詔して公をして看ること詳らかにして、刪して一體と爲さしむ。

公 命を受くと雖も、退きて曰く、「宋公 我に於いて前輩爲り、且つ人の見る所同じからず。豈に悉く己の意の如くすべけんや」と。是に於いて一も易ふる所無し。書成りて奏御するに、舊制惟だ官の最も高き者一人を列するのみ。公の官高く、當に書すべきも、公曰く、「宋公 傳に於いて、功深くして日久し。豈に其の名を掩ひて、其の功を奪ふべけんや」と。是に於いて紀、志、表は公の名を書して、列傳は宋公を書す。宋丞相之を聞きて歎じて曰く、「古自り文人相ひ凌掩するを好み、此の事 前に未だ有らざる所なり」と。

とある³⁰ように、歐陽脩は宋祁を先輩として敬い、列伝執筆における功績を認めていた。かように宋祁に対し敬意を払っていた歐陽脩が、たとえ宋祁の文章が難解であったとしても、本記事のように厳しくその難点を指摘したとは考えにくい。

また顔中其氏によると、歐陽脩が『新唐書』の編修に参加した至和元年（一〇五四）から同書が完成する嘉祐五年（一〇六〇）までの間、二人は一度も会っていないことから、その真偽はかなり疑わしい³¹。このように、中には事実とは考えにくい資料も存在する。

また『直齋書錄解題』は、先に引いた『新唐書』の解題の後に続けて、

歐公嘗臥聽「藩鎮傳序」曰、「使筆力皆如此、亦未易及也。」
歐公嘗て臥して「藩鎮傳序」を聽きて曰く、「筆力皆此くの如からしむれば、亦た未だ及び易からざるなり」と。

という記事を引く（出典は『曲洧旧聞』卷三）。陳振孫はこの記事に対して、「然其『序』全用杜牧『罪言』、實無宋公一語³²。然則歐公殆不滿於宋、名銜之著、固惡夫爭名。抑亦以自表異耶。」（然れども其の「序」は全く杜牧の「罪言」を用ひ、實は宋公の一語無し。然らば則ち歐公殆ど宋に不滿にして、名銜の著さるるに、固より夫の名を争ふを惡む。抑 亦た以て自ら異を表せんとするか。）という自身の考えを示している。つまり、歐陽脩は宋祁の文章に対して不満に思う所があり、宋祁の名前や官位が編修官の代表として記される際、互いに名譽を争うことを嫌って、本紀は自分、列伝は宋祁とそれぞれ分けたのであり、またそうすることで、自分の文章が宋祁のものとは違うというをはっきりさせようとしたというのである。こうした見方もまた、歐陽発の「先公事迹」に見える先輩の宋祁を敬う欧陽脩の態度に反するものである。実際のところ欧陽脩がどのように考えていた

のかは、残念ながら彼が宋祁に言及した資料が少ないため分からない。しかし、欧陽脩が「藩鎮伝序」の書きぶりを褒めたという記事との繋がりを考えると、陳振孫の説は牽強附会であるように思う。

宋祁の書いた列伝は虬戸銑谿の体に近く難しいと述べた後、「識者之を病む」と言い、また前に引いた『佩韋斎輯聞』の冒頭の文章でも「人 札闔を以て之を誦む」と書いているように、陳振孫の時代にはそうした見方が一般的であった。彼のやや強引な捉え方は、当時の大方の評価に同調するかたちで出てきたものと考ええる。

六 宋人の古文観―欧陽脩の平易と宋祁の奇澁

以上のように、宋祁の文章を難解だとする評価では、奇字、『尚書』、虬戸銑谿の体（札闔）と、その要因として様々なものが指摘されている。殊に虬戸銑谿の体は、宋祁の文学観と密接に関わっている点で重要である。第二節で述べたように、宋祁は前人の作品を模倣するというやり方から、陳腐なことを避け、独創的な表現を目指すというやり方に大きく転換した。彼にとってそれは、個性の發揮という自己の課題を克服することであったが、同時にあまりに極端な変化であったため、時に行き過ぎた部分があったものと思われる。その結果、当時の人々が求める古文のかたちから大きく外れるものとなってしまい、様々な批判を招くこととなった。中には事実かどうか疑わしい資料が現れ、牽強な見方がなされるほど、

彼の古文に対する反撥は大きい。ここに、古文復興における宋祁の意図と宋人の評価のずれを見ることが出来る。また『尚書』に関しては、若い頃の読書の好みが後年の『新唐書』執筆に影響を及ぼしたというものであるが、これは宋祁の古文に対する反撥から、両者が関連付けられたものと思われる。

一方奇字については、様々な資料から、彼の詩文中に難読の字がいくらか見られたことは事実であると考ええる。だが同時に、『四庫提要』が指摘することく、宋人は『新唐書』の難解な文章への反撥から、彼の作品をいささか厳しく評価し過ぎていたようである。

では、宋人は古文はどうあるべきものと考えていたのか。このことを理解する手掛かりとなるのが、古文の正統とされた欧陽脩の文章との対比である。前節で見た『直齋書録解題』や『錦繡万花谷前集』に引かれる記事のように、欧陽脩と宋祁の文章は時に比較されることがある。それは、二人がいずれも『新唐書』の編修に参加し、本紀と列伝を分担して執筆したことにもよるだろうが、彼らの文体に対する当時の人々の認識の違いにもよると思われる。例えば朱弁（一〇八五―一一四四）の『曲洧旧聞』巻九に次のようにある³³。

舊説歐陽文忠公雖作一二字小簡、亦必屬稿、其不輕易如此。然今集中所見、乃明白平易、反若未嘗經意者、而自然爾雅、非常人所及。……方古文未行時、

雖小簡亦多用四六。而世所傳宋景文公『刀筆集』、雖平文而務爲奇險。至或作三字韻語、近世蓋未之見。舊説に歐陽文忠公 一二字の小簡を作すと雖も、亦た必ず稿を屬り、其の輕易ならざること此くの如しと。然れども今 集中に見る所、乃ち明白平易にして、反つて未だ嘗て意を経ざる者の若くして、自然爾雅たり、常人の及ぶ所に非ず。……古文未だ行はれざる時に方たり、小簡と雖も亦た多く四六を用ふ。而るに世に傳ふる所の宋景文公の『刀筆集』、平文と雖も務めて奇險を爲す。或いは三字の韻語を作すに至りては、近世蓋し未だ之を見ざらん。

欧陽脩が推敲をこらした文章は「明白平易」、「自然爾雅」であるのに対し、宋祁は「平文（散文）」と雖も務めて奇險を爲したと書かれている。そして、奇險な例の一つとして、彼の『刀筆集』載録の作品に「三字の韻語」のあることが挙げられている。三字の韻語とは具体的にどういうものかはっきりしたことは分からないが、前の文で四六文について触れていることから、句の字数に係していると思われる。また記事には続けて、「近世蓋し未だ之を見ざらん」とあることから、それは彼の創意によるものであった。虬戸銑谿の体や札闔同様、独創的な表現を目指すという文学観に通じるものと言える。だがそうした表現は、宋人にとって理解困難なものであった。

虬戸銑谿の体、札闔、三字の韻語は、いずれも既定の

枠組みから敢えて外れたことをすることで、高い表現効果を狙う点が共通する。ことばを変えると、宋祁は読み手の認識や理解の枠を超えた表現をしているということである。それに対し、欧陽脩は読み手の認識や理解の枠内で良い文章を書こうと苦心しているように見受けられる。また奇字、『尚書』の模倣に関しても、たとえそれが古い文献に基づく正しいものであったにせよ、同時代人にすんなりと受け止められなければ、たちまち奇澁なものとして斥けられる点で、読み手の認識の枠を超えた表現をしていると言える。宋代の古文で重視されたのは、そうした読み手の認識の枠をしっかりと把握し、そこから外れずに文を書くことではなかったか。

宋代は、前代に勢力を誇った貴族階級に代わり、新興地主層が社会の中心となり、経学、史学などさまざまな分野で、それまでに蓄積されたものを今一度自分たちで解釈し直すとする動きが起こった時代である。それは、過去のものを惰性的に受け継ぐのではなく、自分たちが認識し、理解し得ることに基づきつつ行われた。そのことは同時に、自分たちが共通して認識し、理解し得るものは何なのかを再度考え直すということにもなる。古文復興もまた、そうした意識のもとなされたはずである。

宋人が重視する古文の平易とは、つまり同時代の士大夫たちに共有されると考えられた、認識や理解の枠に従うということである。彼らは、常にそうした認識や理解の枠を意識しつつ文章を書き、また他者にもそうするこ

とを求めた。そのため、宋祁のように枠から逸脱した者に対しては、厳しい批判の眼が向けられたのである。

本稿で示した例から見ると、そうした要求はとりわけ表現面に強く向けられていることが分かる。唯一、『尚書』の模倣を述べた記事が『新唐書』の内容の難しさを述べているが、それも『尚書』の難渋な書き方をまねしたのに伴う読解のしにくさを言ったもので、考えや発想自体の奇抜さを指摘したものではない。実際、宋祁は内容面でも獨創性を重視する発言をしているが、宋人の評価にはそれに対する非難の言辞は認められない。

歐陽脩をはじめとする北宋中期以前の古文家たちは、古文を復興すべく、政治家、文人として様々な努力を重ねた。中でも宋祁は、当時の人にすでに認められていた西崑派に繋がる作文態度を大きく変え、古文を志向した人物として注目される。だがそれは、宋祁に表現面における極端な考えの変化をさせることとなり、最終的に正統の地位を勝ち得た歐陽脩の古文の平易から外れるものとなってしまう。かくして、よりよい文章を書くことと苦心した宋祁の努力は、かえって後世の厳しい評価を招くことになってしまったのである。

五 おわりに

本稿では、宋代の書目や筆記などを用いて論述し、また宋祁自身の作品についても、彼の文学観が表れたものだけを用いて考察を行った。今後は彼の他の作品を分析

することで、再度その文学観を確認し、宋人の彼の文章に対する評価が妥当なものかどうか検討する必要がある。

ところで、宋人が古文に対し用字、ことば、典故、一句の字数などで、自分たちの認識や理解の枠に収まることを強い、そこからの逸脱を許さないということは、作者が表現面において一定の制限を加えられるということである。駢文のように平仄、一句の字数の規則の無い古文は、一見すると自由な文章形式であるように思えるが、実際はかように拘束性が強く、個性を出しにくい一面もあつたのである。

では、文人たちはどこで個性を出したのか。古文の良さは一体何なのか。こういったことを、今後考えていきたい。

注

[1] 四部叢刊本『河東先生集』巻一

[2] 『人文論叢』第二十六号、二〇〇九年

[3] 以下、『宋景文公筆記』は百川学海本に拠る。

[4] 「準方作矩」は前句との対で考えれば「準矩作方」に作るべきか。

[5] 『宋史』宋庠伝に「宋庠字公序、安州安陸人、後徙開封之雍丘。」(宋庠字は公序、安州安陸の人、後開封の雍丘に徙る。)とある。雍丘は現在の河南省杞県。

[6] 例えば鄭燾氏が「他既不满浮浅鄙俚的五代文弊，又不滿当时西崑体“近俳优，如绣屏”的诗风」（彼は浮薄で俗っぽい五代の文章の他、当時の西崑体の「俳優に近く、繡屏の如き」詩風にも不満を抱いていた）と述べる（『中国文学大辞典』宋代卷、會棗莊主編、中華書局、二〇〇四年九月第一版、七一―頁）のに対し、祝尚書氏は「就是夏竦（985-1051）、王珪（1019-1085）、前人虽未列入“西崑派”，但他们受“崑体”影响很大。」(夏竦、王珪については、前人は「西崑派」に数えていないが、彼らが「崑体」から受けた影響は大きい。)と言う（『論後期『西崑派』』一、関于後期「西崑派」『宋代文学探討集』所収、大象出版社、二〇〇七年十二月第一版、四頁）。

いでのみ効果があつたことになる。

なお、次に引く『青箱雜記』巻四（稗海本）の記事にあるように、宋祁らは詩によって夏竦と交際し、夏竦も詩によって彼らを評価していた。

文莊守安州、宋苜公兄弟尚皆布衣。文莊亦異待、命作「落花詩」。苜公一聯曰、「漢臯珮冷臨江失、金谷樓危到地香。」子京一聯曰、「將飛更作回風舞、已落猶成半面粧。」是歲詔下、兄弟將應舉、文莊曰、「詠落花而不言落、大宋君當狀元及第、又風骨秀重、異日作宰相。小宋君非所及、然亦須登嚴近。」後皆如其言。

文莊 安州に守たりしとき、宋苜公兄弟尚ほ皆布衣なり。文莊亦た異待し、命じて「落花詩」を作らしむ。苜公の一聯に曰く、「漢臯 珮 冷たくして江に臨みて失ひ、金谷 樓 危にして地に到りて香る」と。子京の一聯に曰く、「將に飛びて更に作さんとす回風の舞を、已に落ちて猶ほ成す半面の粧を」と。是の歳 詔下り、兄弟將に擧に應ぜんとし、文莊曰く、「落花を詠じて落と言はざれば、大宋君當に狀元にて及第すべく、又た風骨秀重なれば、異日 宰相と作らん。小宋君及ぶ所に非ざるも、然れども亦た須く嚴近に登るべし」と。後皆其の言の如し。

[7] 唐代から北宋初期にかけては、科挙の受験者が自らの詩文を有力者に献呈し、彼らに事前の評判を高めてもらうことで、合格の可能性を高める行巻という事前運動が行われていた。これは受験者の名前を糊付けする糊名法と答案を写し取る謄録法が施行されるまで見られた（以上、東英寿『歐陽脩古文研究』（汲古書院、平成十五年一月二十日発行）上篇行巻より見た北宋の古文復興、第三章 北宋初期の古文復興の展開―行巻に着目して―を参照）。荒木敏一氏によると、糊名法は中央の礼部で行われる省試では景德四年（一〇〇七）に、地方の諸州で行われる解試では明道二年（一〇三三）に、始められ、謄録法は省試では大中祥符八年（一〇一五）に、解試では景祐四年（一〇三七）に始められた（『宋代科挙制度研究』（京都大学文学部内東洋史研究会、一九六九年三月三十日発行）第二章 省試、第七節 糊名法及び謄録法、一その成立）。そのため宋祁らのこの事前運動は、解試にお

[8] この年の試験に関し、『六一詩話』第二十八段（四部叢刊本『歐陽文忠公集』巻二八）に次のようにある。

自科場用賦取人、進士不復留意於詩、故絕無可稱者。惟天聖二年省試「采侯詩」、宋尚書謂最擅場。其句有「色映珊瑚爛、聲迎羽月遲」、尤為京師傳誦、當時舉子目公為宋采侯。

科場 賦を用ひて人を取りて自り、進士復た意を詩に留めず、故に絶えて稱ふべき者無し。惟天聖二年の省試の「采侯詩」のみ、宋尚書謂最も場を擅にす。其の句に「色は珊瑚の爛たるに映え、聲は羽月の遅きを迎ふ」と有り、尤も京師に傳誦せられ、當時の舉子 公を目して宋采侯と為す。

ここでは、宋祁は賦ではなく詩によつて称えられたことになつてゐる。

また宋祁の及第の席次について、もともと宋祁が第一位であつたのを、章献太后が弟の席次を兄よりも上にすべきではないと言つたために、もともと第三位であつた宋庠を第一位にし、宋祁は第十位に落とされたことが、『宋史』の彼の伝に見える。

[9] 『座主侍郎書』（佚存叢書本『宋景文公集』巻二二〇）。「座主」は、科挙合格者が採点に当たつた試験官を呼ぶときの敬称。『統資治通鑑長編』天聖二年によると、劉筠はこの年の科挙終了後の四月辛酉（四日）に礼部侍郎となつてゐる。

[10] 「通」、『全宋文』（第十二冊、曾棗莊、劉琳主編 巴蜀書社、拠湖北先正遺書本）は「概」に作る。

[11] 「文」、『全宋文』は「義」に作る。
[12] 「爲」、原文は「謂」に作る。今『全宋文』に拠つて改める。

[13] 『兩宋文学史』（程千帆、吳新雷著、上海古籍出版社、一九九一年二月第一版）第一章 宋初文学的因革、第二節 晚唐体与西崑体、西崑派後期作家、二十頁

[14] 『集韻』（上海古籍出版社、一九八五年五月、拠上海圖書館藏述古堂影宋鈔本影印）附載のものに拠る。

[15] 「戳」、原文は「巖」に作る。『全宋文』は曹棟亨刻本に拠つて改める。今これに従う。

[16] 顔中其氏によると、宋祁が初めて『新唐書』の編修を命じられて同刊修となつたのは慶曆五年（一〇四五）、四十八歳の時であり、本格的に執筆を始めたのは、それまで編纂に参与していた『慶曆編勅』が完成した慶曆七年（一〇四七）、五十歳の時である（『新唐書』修撰考）『史学史資料』一九八〇（二）、『新唐書』的修撰過程、三、宋祁修書的過程和時間。

[17] 前掲注「7」書下篇 欧陽脩の古文復興の展開、第一章 慶曆の改革と古文の復興

[18] 四部叢刊本に拠る。以下同様。
[19] 『宋景文公筆記』は景文という諡を冠していることから分かるように、宋祁の死後に後人によつて編まれたものであり、全ての条が同じ時期に書かれたかどうかは分からない。しかし次に引く二条は、本節のはじめに引いた条の内容との関係から、おおよそ同じ頃に書かれたと判断した。

[20] 「丐」はあるいは「丐」の誤りか。その場合、この一節はことばを前代の作に求めないという意味になる。

[21] 『蘇軾詩集』巻一六（中国古典文学基本叢書、清・王文誥輯註、孔凡礼点校、中華書局、一九八二年二月第一版、八四一頁）

[22] 『蘇東坡詩集』第四冊（小川環樹、山本和義著、筑摩書房、平成二年九月三十日第一刷発行）の注を参照（巻一六、六四九頁）。

[23] 聚珍版叢書本『宋景文集』に附載。

[24] 増補津逮秘書本に拠る。

[25] 知不足齋叢書本に拠る。

[26] 文学古籍刊行社、一九五五年十一月、用明天啓刊本重印。
この他、朱勝非『紺珠集』巻三、葉廷珪『海録碎事』巻一八、『錦繡万花谷前集』巻二〇、祝穆『古今事文類聚別集』巻五も『朝野僉載』を典故としてこれを載せ、『唐詩紀事』巻九にも同様の文章が見える。

[27] 学海類編本に拠る。

[28] 新興書局、中華民国五十八年（一九六九）十二月新一版、

用明刻本

[29] 現在の『新唐書』は「震霆不及塞耳」に作る。

[30] 『欧陽文忠公集』附録巻五

[31] 前掲注「16」論文四、欧陽脩的修書過程及其与宋祁的關係を参照。ただし、欧陽脩『新唐書』編修参加以前の皇祐三年（一〇五一）頃、宋祁は亳州（現在の安徽省亳州市一带）、欧陽脩は南京応天府（現在の河南省商丘市一带）と、非常に

近い場所に赴任していたため、この時そうした出来事があった可能性もある。

[32] 現在の『新唐書』では、「罪言」の全文は杜牧伝に引かれてゐる。

[33] 知不足齋叢書本に拠る。